

# 思考力育成のための探究的活動の方策について（要旨）

## — 一般型入試と探究的活動相互の効用と課題を視野において —

教育実践力高度化コース言語系教育サブプログラム 21AF051

野田 庸平

【指導教員】 戸田 功 山本 良

【キーワード】 一般型入試 探究的活動 主体性 国語科 進路指導

### 1. 課題設定

私の勤務校は「新しいタイプの進学校」「埼玉県のリーディング校」を目指している。

昨年度まで担当した学年の三年間で多くの一般型入試対策を行ってきた。しかし、大学進学実績目標はあと一步のところまで達成できなかった。

来年度から高等学校に学習指導要領の新課程が導入され、「探究的な学び」が求められる中、一般型入試と「探究的な学び」をどう両立するか、実施するにあたって押さえておくべき点は何かを考察するのが研究課題である。

### 2. 本研究における語の定義づけと目標

一般型入試…「高等学校の学習範囲から逸脱せず、客観的な合否判定を行うために解答が一つに定まる、限定的な選抜方法」

探究活動…主に「総合的探究の時間」や「特別活動」で一斉に行われる探究的な学びのこと。

探究的活動…授業のみに限られない、生徒自身の自主的で探究的な学び全般を指す。

一般型入試と探究的活動は下記の通り対照的なものであると認識されていることが多いことから、相容れないものと考えられている。

	一般型入試勉強	探究的活動
主に必要な力	知識・技能重視	思考力・判断力・表現力・学びに向かう力
学ぶ範囲	高等学校の範囲	任意の範囲
学びの期限	大学入試まで	任意の期限
学び方の特徴	他律的	自律的
他方への阻害要因	学びが他律的なものに限定される	学びが自律的なものに限定される
他方への促進要因	応用の元となる基礎基本的な知識が得られる	自分の経験と結びついた学習ができる

しかしその視点を変えて、本研究の目指す目標は、「高等学校の学習範囲から逸脱せず、公平かつ客観的な基準で合否判定を行うための解答が明確に決まっている選抜」という課題を、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を解決していくための資質・能力を育成すること」（高等学校学習指導要領「総合的な探究の時間編」）を適切に意味づけることによっ

て解決できるのではないか。ということである。

### 3-1. 研究方法

まず、一般型入試で実績を上げている進学校と埼玉県の高校・高等専門学校・21世紀型教育を提唱している高等学校の探究活動の取り組みを下のようなモデルで調査・比較し、そこから一般型入試と「探究的な学び」の関りや要点を考察する。

研究協力校の探究活動と「受験指導」				
	進学校	21世紀型教育機構	高等専門学校	県内高等学校
探究活動が受験勉強に資する力				
受験勉強が探究活動に資する力				

ちなみに、表の中の21世紀型教育機構とは、20世紀までの「知識をできるだけ多くインプットして、いかに早く正確に引き出せるか」という学力観では21世紀の社会に対応できない問う考えから15校の中等教育学校によって組織された団体である。これらの学校は以下のようなカリキュラムポリシーを共有している。

- (1) 探究型学習（PBL：プロジェクト・ベースド・ラーニング）…生徒が課題の設定から解決までの方法を設定する教育活動。
- (2) C1英語…CEFLで上位二番目のC1を目指す英語教育活動。
- (3) ICT教育
- (4) STEAM教育+哲学
- (5) エンパワーメント評価…自己評価・他己評価・リフレクション評価の実施

次に、勤務校の学習活動の中で、研究課題を解決するにはどのような手法を元に生徒や教員集団の意識変革をしていかななくてはいけないのか、上記の調査と考察により得られた観点と、現状の「総合的探究の時間」を中心とした学習活動の問題点との異同を検討し、よりよい活動にするにはどうすればよいかを考察する。

### 3-2. 調査の結果

上記4種の学校への聞き取り調査の結果、「受験

勉強が探究活動に資する力」については、どの学校も「応用の元となる基礎基本的な知識が得られる」ということで共通していた。

他方、「探究活動が受験勉強に資する力」については、それぞれの学校で多少の違いがあった。進学校では「粘り強さ」や「学びに向かう主体性」が挙げられることが多かったのに対し、21世紀型の学校では「物事を効率よくこなす力」「自分の得意を最大限に生かす力」、高等専門学校では「計画を立てて実行していく力」、県内公立校では「答えのない課題に立ち向かう力」などが多く挙げられた。

### 3-3. 結果の違いによる探究活動の観点の考察

進学校と特色のある学校との違いを考察するにあたって以下の三点に注目した。①「進学校には誰もが取り組みたくくなるような探究活動があるのではないか」②「探究的活動に向かわせるような仕組みがあるのではないか」③「探究的活動に向かうための生徒の特性があるのではないか」という点である。

①について、教育ジャーナリストのおおとしまさ氏の著書、『名門校の「人生を学ぶ」授業』（※2）を参考にして、進学校の探究活動を比較したところ、下記に活動例の一部を挙げる。

早稲田大学本庄高等学院	大久保山学	本庄市の地域学習 塙保己一の記録 野鳥の観察 等高線 三角測量 統計 英語エッセイ
武蔵中学高等学校	化学基礎 2コマのうち 1コマ	岩石薄片の作成と岩石・鉱物の偏光顕微鏡観察 岩石・鉱物の観察を11月にレポートするために春から削り始める。本物に触れさせる。
開成中学高等学校	大運動会	8色のチームに分かれ高3が責任者となり指導。先輩は成績が悪ければ坊主にする。

これらの活動にはある共通性が見出せた。それは、「俯瞰」と「深掘り」の往還があり、学習者の当事者が達成感を生む活動であることが考えられる。ということだ。

早稲田大学本庄高等学院では、地域の山について「深掘り」していく。研究主題や手法は自由である。情報共有をする度に自分が調べたことと、他者が学んできたことが関連性を持ち、研究主題である大久保山を改めて「俯瞰」することになる。

武蔵中学高等学校では、岩石の剥片を研磨し観察結果の報告に半年間かけている。（「深掘り」）そこで、なぜやるのか、最初はわからないが、経験と知識が結びつく経験ができる。どのような分野においても基礎研究や情報収集が重要であることを感じる。（「俯瞰」）

開成中学高等学校については、大運動会で総合優勝を獲得するために学年の垣根を越えて、休み時間や放

課後を使って作戦会議や練習をする。行事全体を見渡す「俯瞰」と各種目をどう攻略するかという「深掘り」が長年にわたって繰り返されている。内容は大運動会という学習者が主体となる行事である。

上記の例だけでなく、進学校の多くの実践が、個人の活動を「深掘り」した後に全体を「俯瞰」することができると考えられる活動を行っており、自分の経験を、学習を始めとした他の活動に結びつけて一般化し、汎用性のある思考力を育てていると考えられる。

②の「探究的活動に向かわせるような仕組みがあるのではないか」について、テキサス大学の Marina Milner-Bolotin 氏の先行研究(2001)を元に考察した。この研究は、すべてのアメリカの学部生の間での科学研究への動機と関心を強化する方法を模索するためにはどうすればよいかという課題に対して、「プロジェクトに取り組むことで、科学研究における学生のモチベーションが高まり、その結果、より深い概念的理解を促進する」という立場の元、科学または数学を専攻するアメリカの学部生を対象にPBLとその後のアンケート調査を行ったところ、「個人的な価値を感じる」「思いのままになると感じる」「責任をもつこと」が学生の主体性に大きく関与していたことを裏付けたものである。

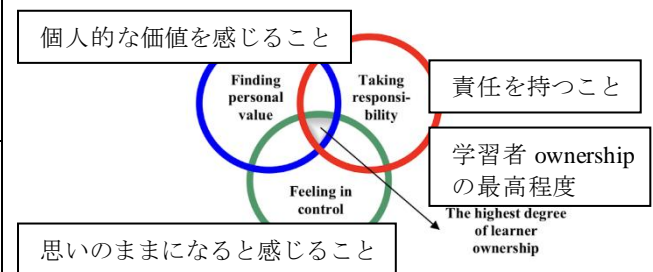


Figure 2-1: Learner ownership as an interactional effect between three components of learning process: taking responsibility, feeling in control, and finding personal value.

学習プロセスの3つの要素間の相互作用効果をみた際の学習者の所有権：責任性、恣意性、個人的な価値

Milner-Bolotin(2001)のイメージ図

上記の三つの観点から、聴き取り調査を行った4種類の学校探究活動を比較検討した。

埼玉県内の高等学校（特に専科を設けている学校）と高等専門学校においては似たような特徴を持っていることが考察された。

まず、「個人的な価値を感じる」とについては高等専門学校や県内高等学校の専門科において、学習内容が自分の専門としたい科目に偏っていることに関して、納得して入学しているため価値を感じている生徒が大半である。特に高等専門学校では国語科も大学入試対策ではなく、いかに論理的に伝えたい内容を的確に表現できるかということに比重が置かれている。これは、専科の課題研究や社会に出た後の研究報告や論文作成に資するような力の育成を主眼に置いた学習活動がされ、生徒にとっても「実用性」が感じられるものになっている。

次に「思いのままになると感じる」とについて、

学習内容の自由度については課題研究についてのみ自由さを感じている様子で、通常授業については限られた授業時間の中で普通科の学習内容に比べて数倍もの専門的知識を取り扱わなくてはならないことから、授業の進度が早く生徒にとっては受け身な一斉教授型の授業が多くならざるを得ない。したがって、生徒は「思いのままになると感じる」ことが少なく、「この特色ある学校を選んだから」と自身に折り合いをつけていることもある。

最後に「責任をもつこと」に関しては、将来自分がやりたい学習活動なので、自ら学ぶことに責任を持っている。という回答が得られた。

埼玉県内の普通科の生徒については1項目目と3項目目、「個人的な価値を感じる」と「責任をもつこと」を感じている生徒が比較的少ないという証言も聞き取り調査の中から得られた。

	埼玉県内の高等学校（専科）	高等専門学校
個人的な価値を感じる事（finding personal value）	課題研究など、先輩たちの学ぶ姿を見て、自分もこうなりたくて入学を決める生徒がいた。	課題研究や「ロボコン」など、将来自分がやりたい学習活動を高いレベルでできるため、価値を感じている。
思いのままになると感じる事（feeling in control）	特色ある活動に対して「この学校を選んだから」と自身に折り合いをつけていることもある。	特色ある活動に対して「この学校を選んだから」と自身に折り合いをつけていることもある。
責任をもつこと（taking responsibility）	入学選抜の際に自ら選んで入学しているため、学ぶことに責任を感じている。	将来自分がやりたい学習活動なので、自ら学ぶことに責任を持っている。

続いて、進学校と21世紀型教育機構を考察していく。

まず、「個人的な価値を感じる事」について、進学校では、進学実績をはじめとした教育活動上の実績を残してきた学校の「伝統」という裏付けによって、実施される教育活動には価値があると信じてその活動に前向きに取り組む生徒が多いようだ。一方、21世紀型教育機構ではPBLによってプロジェクトが達成されるプロセスを、することを通して学んでいる。課題解決をする過程社会に出てから使える能力として価値があると感じている。

次に「思いのままになると感じる事」について、進学校の伝統として受け継がれている探究活動では、過去の先輩が学習した足跡が資料として与えられ、そ

れを元に計画などを自分たちで設計する。

つまり、与えられるのは学習活動のテーマと資料という大枠だけで、企画をある程度自分たちの裁量で検討する余地がある。21世紀型教育機構ではそもそも学習内容を自分のプロジェクトとして設定し、学習プロセスについても自分で決めた方法で学んでいるので、思いのままになると感じている。

最後に「責任をもつこと」に関しては、進学校では、学校の伝統や学習活動に惹かれて入学しているため、その一員として努力しなくてはならないと感じている生徒が多い。21世紀型教育機構では学ぶ方法を自ら設定しているため、学ぶことに責任を感じている。

	進学校	21世紀型教育機構
個人的な価値を感じる事（finding personal value）	実績を残してきた学校の「伝統」という裏付けによって、その活動には価値があると信じてその活動に取り組む。	プロジェクト達成のプロセスを、することを通して学んでいる。社会に出てから使える能力として価値があると感じている。
思いのままになると感じる事（feeling in control）	過去の先輩が残した資料を元に計画などを自分たちで設計する。つまり、企画をある程度自分たちの裁量で検討する余地がある。	自分のプロジェクトを自ら設定したプロセスで学んでいるので、思いのままになると感じている。
責任をもつこと（taking responsibility）	学校の伝統や学習活動に惹かれて入学しているため、その一員として努力しなくてはならないと感じている生徒が多い。	学ぶ方法を自ら設定しているため、学ぶことに責任を感じている。

21世紀型教育機構の実践は、「思いのままになると感じる事」を探究の型（疑問⇒仮説⇒検証⇒結論）に乗せることで他の2要素も満たしており、新しい教育指導要領に適っているように見受けられるため、好例に思える。

しかし、そこに2つの問題点がある。1つ目は、「疑問」から自分で課題設定をするので、自分の力を超える課題や課題解決法の設定ができないということだ。そうなってしまうと、現存の知識の振り返りは出来るが、未知の課題や解決困難なものに取り組めないことになる。場合によっては楽な課題設定をしてしまう。2つ目は探究の型を習得するだけの応用が利かない学習になってしまうということだ。過去に用いた探究の型を繰り返すことで、その手法には熟達していく

が、熟達すればするほどに形骸化し、学習者にとって新たに得るものが少ない実践になってしまうことが予想される。

③「探究的活動に向かうための生徒の特性があるのではないか」という点については、進学校に通う生徒がどのような経験から、どのような特性を得ているかを考察し、その他三種の学校との比較を行った。

進学校の生徒は「受験勉強」を経験していることで「やればできる」という自尊心が高い。

と言える。この時、「受験勉強」とは、「妥協せずに望んだことにより、真の成功体験と自負している受験勉強。」を指し、「やればできる」という自尊心とは「根拠のない自信」とも言い換えられる、正解のない、途方もない目標を叶えるのに必要な力。のことを指している。

この能力を細分化すると以下ようになる。

中学受験(幼小受験)経験者

基礎学力 受験対応力 洞察力 誘惑に打ち勝つ精神力 自尊心	自分自身
モチベーション維持 応援・経済的援助	保護者
計画調整・分析 質の高い授業	塾の講師

高校受験成功者

基礎学力 受験対応力 自尊心	自分自身
----------------	------

高校入学時までには受験勉強を通して成功体験を積み重ねてきた生徒は上記のような能力を持っていることが予想される。中学受験に成功するには保護者や塾の支援をすることが大多数になっている。これらも含めて、最上位の進学校に入学ができていない生徒は以下のような探究的活動に向かおうとする性質を持っていると言えよう。

- ・自尊心が高くチャレンジ精神がある
- ・学力が高く、課題や解決策を適切に設定できる
- ・物事を分析的に捉えることの良さを知っている
- ・綿密な計画に沿うことの良さを知っている
- ・応援されることの良さを知っており協働できる
- ・モチベーションを高めてもらったことがあるため、チームの活動を円滑にしようとする
- ・課題を自分自身で調整したことがある
- ・達成の喜びを知っている

他方、進学校以外の生徒はどうだろうか。

高専生・高校の専門科

特定分野の基礎学力 受験対応力 特定分野への主体性(自尊心)	自分自身
-----------------------------------	------

21世紀型教育機構

探究的な学習への理解・前向きさ 英語力 表現力	自分自身
----------------------------	------

高専・専門科においては入学試験の際に理数科目への傾斜配点が設けられており、学習内容においても理数科目を重視していることから、特定分野についての基礎学力やその科目を学ぶことに対する主体性を持っていることが最大の特徴である。一般的な高等学校に比べると極端な学習活動をしているにもかかわらず倍率が高いということから、理数科目が得意な人の

中でも上位であるという自尊心も一部は持っているかもしれない。

21世紀型教育機構の学校については、日頃から課題や解決策の設定を自分たちで行うことが周知されており、発表の際には英語でのスピーチなどを求められることをあらかじめ知って入学しているので、英語力や表現力がある。

そこから、高専・専門科・21世紀型教育機構の生徒の持つ特性の共通点は、探究的活動に資する長所を持っており、日々の中で課題解決をすることで、汎用的な課題解決能力を養っていると考えられる。

進学校の生徒の特性は過去に「受験勉強」で得た成功体験から、探究的活動に向かおうとする性質を得ているので、自尊心を高く保ったまま進学先での探究的活動と地道な勉強の両立または切り替えができています。

よってこれら①～③の観点をまとめると

①「取り組みたくなるような探究活動」

⇒「俯瞰」と「深掘り」の往還、当事者性による達成感。生徒自身が関連性や本質を見出す活動。

②「探究的活動に向かわせるような仕組み」

⇒学習者にとって未知・難解な課題を解決する過程で「思いのままになると感じ」させ、学習者に「責任をも」たせると同時に、活動内容を広く公開することで認知度を高め、希望者に繋げていく方策が有効ではないか。

③「探究的活動に向かう生徒の特性」

⇒探究をするための知識・計画性・協働力・自尊心を応用させ、経験を通した深い学びができる。

### 3-4. 探究的活動の性質と探究活動実践の仮定

○探究的活動は学びの質を向上させる性質を持つ

・各校への聞き取り調査において、「受験勉強が探究活動に資する力」を聞いた結果、どの学校も「応用の元となる基礎基本的な知識が得られる」ということで共通していた。

○進学校においては、探究的活動と一般型入試に相互促進作用が大いに認められる

・その主要因は「受験勉強」を始めとして自分の学習が着実に認められてきた「成功体験」がもたらす自尊心によるところが大きい。

○探究的活動の充実には一般型入試に必要な学力を必要とする

・各校への聞き取り調査において、多くの学校から知識を活用しない(伴わない)探究活動は、課題の設定や課題解決の方策を練る段階で稚拙なものになってしまい、高度な内容にならないという意見が多くある。

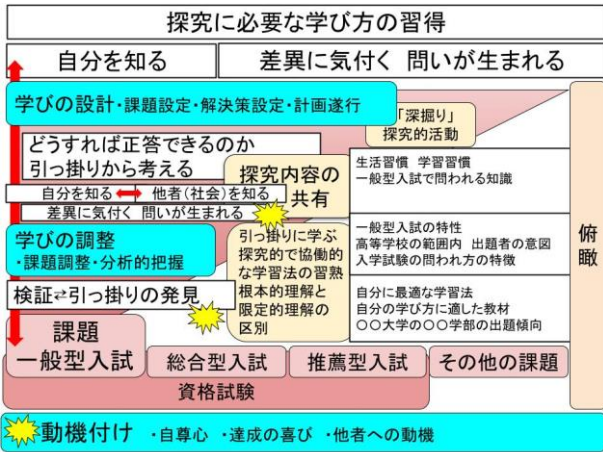
○一般型入試向けの学力は、高度に「限定」されているため、焦点化しやすい半面、探究的活動の対象としては「限界」が存在するため、これまで探究活動の主題となっているような事例があまり見られない。

そこで、一般型入試に資する探究活動の方策を立てるための仮説を以下のように設定した。

「進学校以外(勤務校)においては「限界」に届く(進学校化する)まで、一般型入試を探究的活動のテーマとすることで、進学校と同様の相互促進作用を成立させ得るのではないか」

### 3-3. 勤務校の実践を検証するためのモデル

次の項で検証するモデルは次のとおりである。



(検証モデル実施イメージ図)

先に得られた考察に則ると、事前に探究に必要な知識を得ているか、「俯瞰」と「深掘り」の往還があるか、「探究的活動に向かう生徒の特性」を育む実践となっているか、という点を満たしているかが重要だ。

社会的な課題を主題とした探究活動では探究する領域に関する知識が多ければ多い方がいい。しかし、一般型入試を主題とした場合には、解答の根拠を持って答えられているか、また、それを伝えられるかというのが大事になってくる。最初から知識を持っておく必要はないが、自分の考えを共有する主体性やコミュニケーション能力があれば、充実した活動ができるので、正誤関係なく対話をすることで、これらの能力を養うことにもつながる。

既存の知識を元に「自分の経験と結びついた応用が利く」学習実践となり、「学習活動および、学びそのものに向かう主体性」が育まれる実践にするには次の3つの要点がある。

- ・学力が高い生徒と低い生徒で学習機会に差が生まれない活動であること
- ・自分の知識と他者が持っている知識、課題達成に求められる知識を比較して合理的な理解をすること
- ・一般型入試以外の課題を探究する場合にも応用が利く探究活動であること

次項では上記のモデルを踏まえて、まず、国語科での実践を中心とした一般型入試をテーマとした探究的活動が学びの質を向上させる性質を持っているかを考察する。次に、本校の現状の探究活動が、学びの質を向上させる性質を持っているかを考察する。

#### 4-1. 一般型入試を探究的活動のテーマとする理由

しかしながら、探究的活動が社会的な要請に則ってカリキュラムが作られている以上、社会的な課題を取り上げて探究すべきではないかという反発を招く恐れがある。しかし、以下の点より、一般型入試を探究していくべきであると考え、論を進めていく。

- ・知識不足で探究をするほど他校に差をつけられる。
- ・本校生の共通の課題であり、現状の振り返りが少ない探究活動に比べて、定期考査や模擬試験などで

達成度チェック機能がある。

- ・閃きやセンスがなくても、乗り越えられ、自信が無い人ほど乗り越えることで自信を付けられる。
- ・一般型入試は大学入学資格が得られる資格試験である。資格社会の中で、資格をいかに勝ち取るかを探究的に学ぶことは生徒にとっても価値のある学習だと捉え直しやすいのではないかと。

したがって、一時的な心理的抵抗感によって学習に手が付かず、時間切れになって自己実現の道を見失う経験をするより、一般型受験に真っ向から取り組んで探究すべきである。

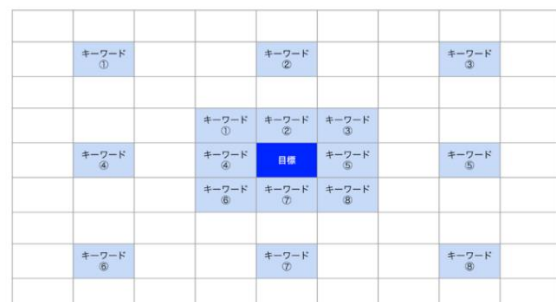
#### 4-2. 国語科での一般型入試の探究活動の具体例

国語の授業やHRなどなどを通して、前述のように事前に探究に必要な知識が得られ、「俯瞰」と「深掘り」の往還があり、学習者の当事者性が達成感を生む活動」であり、「探究学習に向かうための生徒の特性」が育まれる実践例と関連のある他の科目を順に紹介して、考察していきたい。

##### ①「SDGs」ならぬ「SLGs」を作ろう(全科目)

課題全体を俯瞰し、課題で求められる学力と自分の学力を比較する学習活動である。「SDGs」についてはもう説明する必要もないだろうが、「SLGs」は「持続可能な学習目標」ということである。大学入試までの期間にどのようなことを達成しなくてはならないかを表などにまとめ、見通しを持つ活動である。一般型入試と「SDGs」の共通点は多くある。年限が決められていること、複数の大きな目標を達成する為にさらに細かいターゲットを具体的に達成していかなければいけないこと、達成が困難と思えて眼を背けたくなってしまう課題であること、など多くの共通点がある。そこで、学習者自身が、自分でゴールを達成する為にはどのような条件をクリアしなければならないのかを調べさせ、一目で確認できるようにすることで、これから学んでいくことに対して自覚させることができる。

この活動で得られる考察であられた要点は、ゴールまでを見通す「俯瞰」と自分の進学希望を叶える方策への「深掘り」、目標を掲げることで「動機付け」につながり、何をしなければいけないかを羅列することで「学びを設計」し、必要に応じて自分の設計を見直したときに修正をすれば「学びの調整」を行うことになる。やはり課題解決をする際に課題を正しくとらえることは必須条件であると言えそうだ。なお、「SDGs」の目標数が多いということであれば、「マンダラチャート」を使うのもいいだろう。





参考資料：上・マンダラチャート  
下・「SOGs (持続可能なオタク目標)」

### ②課題発見テスト

問いを立てるためには、自分の価値観や認識と探究対象との差異を感じる事が不可欠である。この学習活動は学習者が単元を通して学ぶ概念を含んでいる大学入試の過去問題などを事前に解き、自分が引っ掛かったところを問いにして単元の学習課題設定を行うものである。そうすることで、学びの必要性を感じる事が「動機付け」となり、自分の見方や考え方を学習の中で他者と共有することで「深掘り」と「俯瞰」の往還になる。そうすると、自然とこのテストでの生徒の誤答を取り上げることになり、誤答をした生徒が学習活動の中心となる。なぜその解答をしたのかを共有することで、誤答した生徒は正答の根拠を知って納得することができる。正答した生徒は誤答をしてしまう原因がわかるだけでなく、正答の根拠を言語化して説明することで自分の解答に至る考え方を整理して理解することができる。こうしたテストに限られた理解を、限定的理解とすると、誤答者の解答の根拠には物事の根源的理解につながる考え方が含まれている可能性もある。一概に間違いと断定できない誤答から、一般型入試でない課題への飛躍が見込めることもあるのではないだろうか。

高等学校では通常、定期考査を一定期間の最後に実施し、それまでの知識の積み重ねを測って成績に反映させていた。何ができれば高得点が取れて、成績が上がるのかを隠したままテストを行っており、学習者にとっては納得のいかない学習形態となっている。

### ③単語の暗記・定着法を開発しよう (英語など)

これは学習者の前に次々と現れる短期的な課題の学び方を探究する活動だ。単語などの覚え方に焦点化して、学習者が自分の最適な学び方を見出し、他者と共有する活動である。たとえば、英語の接頭辞や古文単語の語源について知っている、想起するきっかけや他の単語を覚え、語彙を広げる際の基礎になる。

この活動では極めて短い期間で小テストなどの成果を分析するため「学びを設計」「学びを調整」する力が主に養われる。学習者が自分の学習法を他者と共有することで、自分や他者の差異に気付くことになり、学び方の「深掘り」と「俯瞰」が得られる実践でもある。

### ④単元の本質を究めよう (各教科)

これは、定期考査などで範囲が見通せる課題に対

して能動的に取り組んでみる実践である。単元(範囲)を納得いくまで学習し、要点をまとめて他の人に教える。共有する中で得られる共通点や、他者のものの見方考え方から、自分の学び方の参考になることもあるだろう。

自分が選んだ単元に対する「深掘り」を共有することで、単元や教科を越えて大事なことが共通していることを知ることで「俯瞰」にもつながる活動である。教え合いをすることで「他者への動機づけ」をすることになるが、これは自分への「動機付け」にもつながる。さらに、他者に説明しないと行けないという責任感から、自問自答をしてわからないことを無くしてから活動に臨むことで、「学びの調整」になり、自分の学び方が定期考査で通用するのを見極め、反省材料とすることもその後の「学びの調整」をすることにつながる。

### ⑤マイベスト参考書を決めよう

この活動は自分に合った参考書をとことん追究する活動である。一般型入試を探究する際の資料は過去問題や参考書である。直前までは他の指標を見る必要はなく、自分の学力向上が最優先だ。

これまでの自分の学び方と、参考書の構成や伝え方を「深掘り」し、他者とプレゼンテーションし合うことで、自分が気付かなかった理解の仕方や観点を知る「俯瞰」につながる。そうすることで「学びを調整する」力が身に付くことが大いに期待される。

### ⑥国語の一般入試で求められる力

- ・一般型入試と「文学」の境界線はどこか
- ・「論理的」な理解とはどういうことか (全科目)
- ・マンガで掴む和歌の解釈

現代文領域を扱った上の2つについては、一般型入試の読み方や解き方を理解する上で、重要な見方考え方を習得できる課題であると言えよう。前者は文学批評の観点を知り、一般型入試ではどの観点までは問われるのかを知る。後者は論理的に正しいとはどんなことを言うのかを考えさせる課題である。

生徒にとって古文の原文、特に和歌の解釈は前後の文脈の意味を取って心情を把握することができないと、より解釈が困難になってしまう。

マンガの利点は2つある。まず、内容全体を大掴みに理解することに優れている点だ。詳細な事柄について触れなくとも文語文では読み取りにくい心情なども視覚的に容易に理解できる。次に、抵抗感なく受け入れられるという点だ。高校生にとっての古典は学習意義が湧きにくく、抵抗感がある。その題材をマンガという楽しむためのコンテンツで理解するのは最も効率的と言える。この学習で得られるのは、限定的理解をいち早く得ることでその後の「学びの調整」をする意識である。

### ⑦授業担当者が100点を取れないテストを作ろう

この活動はこれまでの学習の集大成として授業担当者に対して生徒が自作した一般型の入試問題を出題する。一般型入試の形式で問題を作成し、担当者に出題する。他のグループがどのような問題を作ったかを見られるようにしておくことで、解答の根拠

にどのような点を用いているのかなどの他者の考えを知ることができる

この活動も全ての観点を網羅している。自分たちで作ることで、一般型入試の特性を確認することができる。指導者に高得点を取らせないようにするというゲーム的な要素が「動機付け」になっており、問題作成の際には過去問題の出題傾向から「学びを設計」し、作問したものを自分で解いたり、解説をつけたりすることによって「学びを調整」する。語彙問題や選択肢形式、記述形式を織り交ぜて問題を作成することは、全体の「俯瞰」と各設問の「深掘り」を往還することになっている。

#### 4-3. 一般型入試を探究的にする要点

一般型入試は高度に限定されているため、その課題を解決する過程に関しても、限定的に見通すことができる。正解のない問いに立ち向かうよりも単純明快なのだ。したがって、不正解に価値を見出し、活用できるほどでなければならない。一般型入試で求められる学力と自分の現状の差異を知り、その差をいかに合理的に納得しつつ埋めていけるかを追究することで、常に自らの問いを見つけながら、生徒は主体的に探究するだろう。

#### 5-1. 勤務校の現状と課題

現在、勤務校の1年次で行っている探究活動は次のようなものである。

	現状	課題
実施プログラム	学習と探究社 コーポレート アクセス 提携企業からの ミッション 中間発表→修正 →最終発表	探究テーマが企業から与えられるため、課題設定が身近な問題から離れた主体的でないものになっている。全国大会に行かないと企業のフィードバックが得られない。
活動内容	ブレインストーミング 話し合い スライド作成 プレゼンテーション リフレクションシート	高校一年生の知識しかない状態で活動を行っても、深まりが見られず、得られる成果としては達成感のない活動になってしまっている。 スライドの作成方法やデザイン、プレゼンテーションの方法については生徒に委ねられている。より良い発表になるかを学ぶ場面は設けられず、学ぶ方法も担当教員が示していない。
教員の役割	ファシリテーター	教員が専門外の内容に触れる機会が多く、探究活動への有効な促進を行えていない。活動はしているが、中身の薄い意味の薄い学習になっている。

勤務校の探究活動において、探究に必要な知識を得ているか、「俯瞰」と「深掘り」の往還があるか、「探究的活動に向かう生徒の特性」を育む実践となっているか、という3点を確認する。

まず、事前に探究に必要な知識を得ているか、という点については高校生の知識のみで社会的事象に立ち向かっているため、他の年代の課題の解決法を想像しても現状に即しておらず、よりよい解決に至っていない。実際社会のリサーチが足りず、適切な助言を得られていないことから、既に存在するサービスの二番煎じのようなものを提案が多い。

次に「俯瞰」と「深掘り」の往還についてだが、「俯瞰」については教員からプロジェクトの実施日程が示されるだけで、生徒達自身が見通す目を持たず、教員も持たせるよう指導していない。そのため、時間が足りないグループが多く出て、当初の日程を変更せざるを得なくなったり、充実していない時間が生まれたりしてしまっている。探究成果の共有についても、感想を交換することで終わってしまい、共通点や相違点、関連のある事項の共有など、思考力を育てる活動に至らず、他の学びに応用できる考え方を得られる仕組みになっていない。

最後に「探究的活動に向かう生徒の特性」を育む実践となっているか、については最初の見通しが立てられておらず、生徒たちに探究を深める知識も方法も伝えられていないため、いずれの「学びに向かう特性」も効果的に高められていない。しかし、話し合い活動をしているので、教員・生徒共に満足度が高く、見直しがなされないのが現状である。

#### 5-2. 学校内プロジェクトによる現状の改善案

以上のように多くの問題点を抱えている勤務校の探究活動ではあるが、主な改善点としては以下の4点である。

- ・探究に必要な知識を生徒が得ていない。
- ・課題設定を自ら行っておらず、主体性が薄い。
- ・課題設定・課題解決の見通しが立っていない。
- ・適切な批評を得られず、学び方の改善や深まりが少ない。

これらの課題について一般型入試をテーマとする探究的活動案は学年を超えたグループ学習「進路と資格」—学校内ラーニング・コンサルティング・プロジェクト—（以下、校内LCP）で達成できる。2年生が1年生とチームを組み、LHRの時間などを使って学習の指導や学習相談に応じるものだ。期間は一学期の中間考査後の定期考査で、成績上位・成績順位上昇率上位各5グループを表彰するというものだ。

校内LCPの効用はというと、まず、1年生は最初の定期考査が終わったところで結果に悲喜こもごもしているが、その後どうしたらいいかわからない状態である。そこで先輩にどのようにこの一年間学習してきたかを聞いたら、その後の学習をどうすればよいかを理解できるだろう。次に、課題設定についてだが、課題は学力向上になるので自分で課題設定をしているわけではないが、テーマは学年を問わず共通しているので主体性が生まれることが見込め

る。グループ学習による責任感や緊張感から、さらなる「動機付け」の効果が期待される。課題設定や解決法については各グループに委ねるものとするが、2年生が1年生に見通しを持たせ、学習法などを質問することによって、次の定期考査への目標や具体的な対策を立てることができるだろう。最後に適切な批評については年齢が近い、つい昨年同じ課題に取り組んだ経験をした先輩からのアドバイスになるので、素直に聞き入れられるに違いない。成績向上に関しては自分の引掛掛りをいかに解消していくかが重要なので、プライドが邪魔して相談しにくいことも程よい距離感のある関係性の先輩に相談をして解消できるようになると理想的である。

校内LCPの利点は1年生だけにあるのではない。もちろん2年生にも、自律的に学習に取り組むようになる効果が期待できる。まず、形式的にでも頼られる立場になると責任感が生まれ、関わりを持つ中で自尊心が変わる。学習指導の際には1年前の内容の復習になり、ラーニングピラミッドの中でも最も定着率が高い、教える活動をすることで記憶への定着が見込める。さらに、言語化して教えることに加え、図や表などを用いて工夫して説明をしたとすると自分の学び方を見つめ直す契機になる。そして、グループとしての結果に表れたとしたら、さらなる自尊心につながり、表彰まで至らなかったとしても、最後に下級生からの感謝を伝えることできちんと終えることで、多少なりとも自尊心や達成感を得ることになる。

実際の現場での上級生による指導は、専門的な知識技能を伝える看護や工学の大学、高等専門学校、専科の高校などで行われている。特に看護の学校では、上級生が模擬患者になるなどの例が見られた。上級生が自身の実習経験からリアルな患者を演じられる利点や、逆に介助を受ける側に立ち、上級生にもリフレクション効果が期待できるという考察があったので、校内LCPの考察と一致している。学年を越えた心の通った関りが生まれる実践になるのではないだろうか。

## 6. 課題と展望

本研究は、高等学校の先生方への調査に始まり、未曾有の新型ウイルスによって社会情勢や学校の業務が慌ただしい中、聴き取り調査にご協力いただいた先生方には、本当に感謝しております。この場を借りて御礼申し上げます。

さて、発表者個人の課題としては、現場の具体的な声から考察を進めたことで、先行研究との関連を十分には検討できなかったことがある。本研究で発表者が設定した学習者の主体性に関する捉え方は、先行研究においても様々な立場や観点から論じられているので、先行する論との交流を通して、生徒にとってより良い実践を追求するための適切な捉え方をさらに追及していきたい。

一般型入試は最終的に個人での戦い、と言われることが多い。それは一面では真理であるが、そのような個人での学びの過程において、他者との対話を

交えた探究的な学習を介在させた方が、個人としてのモチベーションとともに学びの質も高めることができる。『ケーキが切れない非行少年たち』にはこうある。

“彼らが変わろうと思ったきっかけは何か？”を知ることは、学校教育へのヒントにもなると思います。そこで変わろうと思った彼らの実際の声を聴いて以下にまとめてみました。

- ・家族のありがた味、苦しみを知ったとき
- ・被害者の視点に立てたとき
- ・将来の目標が決まったとき
- ・信頼できる人に出会えたとき
- ・人と話す自信がついたとき
- ・勉強が分かったとき
- ・大切な役割を任されたとき
- ・物事に集中できるようになったとき
- ・最後まで諦めずにやろうと思ったとき
- ・集団生活の中で自分の姿に気が付いたとき

(紙幅の関係で部分のみ引用)

この本で取り上げられたのは学力不振の生徒の事例であるが、多くの高校生が、後に控える進路実現への不安から早々に自らに見切りをつけ、生き生きと生活できていない状態に程度の差はあれ陥っていると考えられる。遠い将来の不安が漠然と彼らの現在を覆っているのである。実際には進路実現の障害となり得る問題の大半は資格に関するものであり、現代社会においては学力をつけることで単純に解決する。ただし、その解決への道が無味乾燥したものであってはならず、また、彼ら自身の納得なしに進めてはいけない。生徒は、誰も勉強ができるようになりたい、社会に有用な人材になって自信に満ちた人生を送りたい、と考えている。そのような悩める生徒たちに道を示すためには、教科学習と総合的な探求の時間を単に形式的に区切ってバラバラなものとして学ぶよりも、学習者同士がお互いに素のままの自分の問いを交流し合い、本来の探究的な学びの在り方が可能になるような条件を整えてから学ぶ方が、主体的・自律的に学ぶことができると考える。来年度から、そのための企画を様々に試行錯誤しながら進めていきたい。

## 7. 主な参考文献

- 高等学校学習指導要領「総合的な探究の時間編」及び「国語編」 文部科学省 2019年  
おおたとしまさ『名門校の「人生を学ぶ」授業』  
SB新書 2021年2月  
Marina Milner-Bolotin「The Effects of Topic Choice in Project-Based Instruction on Undergraduate Physical Science Students' Interest, Ownership, and Motivation  
プロジェクトベースの指導におけるトピック選択が物理学部の学生の興味・所有権及び動機付けに及ぼす影響」  
The University of Texas at Austin May, 2001  
竹村節子「上級生模擬患者による看護学生の学び」  
千里金蘭大学紀要 2013年  
宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』  
新潮新書 2019年7月26日